

「やりとり」練習をして「読解力」「聴く力」をアップさせましょう！

私は 2008 年 4 月に、会報「親子マンボウ」の縮刷版を「子どもに学ぶ」と題して発行いたしました。その「まえがき」で、私は次のように述べています。

『第一部「子どもからの投稿文」からは、当時と現在の子どもの像の変化を読み取ってください。投稿している子どもたちは、「書く」ことで自らカウンセリングを完結させています。そして「書く」ための言葉を知っています。読み返ししながら、改めて「書く」意味の大きさを再認識させられました。「書く」ためには「読む」が必要であり、「読む」「書く」ためには、「聞く」「話す」が前提でしょう。「話す」「書く」ことは、自分の中に文章を組み立てることであり、それが自然に生き方を組み立てることに繋がるのだと思います』

『第二部「相談室での子どもと井澤のやりとり」では、どういう「やりとり」であれば、子どもが自分の本音話してくれるのか、に気づいてください。子どもは、親との心地よい「やりとり」で心が満たされます。「やりとり」に親の都合を優先してはいないか、また親の権力を振りかざしてはいないか、あるいは、子どもの言うことを、分かってもいないのに、分かった、分かったと、自分に嘘をついていないかなど、これまでの悪しき習慣に気づいていただければ嬉しく思います』

なかなか行動変容に至らない方（親も子どもも）は、下記によるのではないかと思うようになりました。

- ① 言葉の意味について、辞書にある意味は知っているし、書ける。
- ② 文を読むこともできる。
- ③ しかし、その言葉の意味を、自分独特のスキーマでキャッチしてしまい、その文が、書いた人が、何を伝えようとしているのかという、文全体が意図する意味は理解していない。つまり自分にその文の内容は関係がある、と相互作用しようとはせず、ただ機械的に、無機質に読んでいるだけである。外山滋比古さん式に言えば、アルファー読み（既知のものを読む）はできるが、ベーター読み（未知のものを読む）は出来ていないということ。
- ④ であるから、他者が話す内容も、書かれた文章も、既知の内容は入るが、未知の内容については、それほど自分にとって意味のあることを言っているのではないだろうと勝手に解釈してしまう。だからきちんと子どもの話をきいていないことになり、また話そうともしないのではないか。ましてや未知の文章ともなれば、丁寧に自分の頭で点検しながら、理解しようという姿勢で読もうとはしないのではないか？
- ⑤ そういう習慣が身につけてしまっているので、他者から話しかけられても咄嗟に反応ができず、一般論で対処するか、自分の都合のいい理由を勝手に自分に言い聞かせて済ませてしまう。

本来人間は、「新しい知識（刺激）が入る」⇒「感情が動き」⇒「思考し」⇒「意識が変わり」⇒「行動する」ということになるはずで、行動変容がないということは、この段階のどこかに遮断が生じていると考えられます。現段階では、「新しい知識（刺激）が入る段階での問題」だろうと判断しています。

このことはそれほど簡単に済ませていいことではなく、人間がいきいきと生きる姿とは逆行していることになり、つまりは自分の能力を駆使していないことであると自覚しておくべきです。

脳の「海馬」を研究している池谷祐二准教授は、「健康的な生き方をしていれば、脳は、常に変化しながら成長し続ける。116 歳で亡くなった女性の脳の解剖結果に、殆ど衰えは見られなかった。『脳は機械のように使い古されることがない』ことを証明した」と言っています。

新しい未知の刺激を受けても、自分自身と相互作用しないことは、自分の脳を退化させていることになります。若者も親御さんも、自分の「やりとり」を活発にすることを通して、ご自身の脳の開発を続け、行動変容を目指していただければと期待しております。

下記日程によります。ご参加ください。

○「やりとり講座」で使用する資料は、

- ① マリオネット・ディズ（篠原まり）——主人公“秋音”の言葉が、母親には都合のいい解釈でしか

受け取られないために、思春期に精神的混乱を生じるようになる。しかし秋音の周囲には、美由紀はじめ多くの仲間や近隣の人たちがいた。そしてその人達は、秋音の言葉を事実のまま受け取ってくれた。そしてその言葉に対するその人の本当の反応が返ってきた。それだけで彼女は母親の“都合のいい解釈の世界”から解放され、混乱は次第に整理されていった。そして「自分」を取り戻し元気になっていく。

- ② **カウンセリング的態度**——日常的に濃密な人間関係が維持されていれば、カウンセリング等は不要である。人が生きて行く上で、「母のまなざし」は、生涯にわたって必要なものである。
- ③ **真の自己と偽りの自己（ウイニコット）**——子どもは18ヵ月頃から母親とは分離・個体化を始めるが、その子どもの欲求に母親が“鏡像的”に応えられなければ、子どもは「偽りの自己」を形成していくしかない。
- ④ **わたしの親子関係（岸田秀）**——3通りの親のタイプが描かれており、岸田の養母のようなタイプに育てられた子どもは精神的に病むことになる。
- ⑤ **じぶん・この不思議な存在（鷲田清一）**——レインは「人は自分の行動が他者に及ぼす効果によって、自分が何者であるかを理解する」のであると言う。
- ⑥ **分裂病の始まり（サリバン）**——分裂病者は多種多様の適応失調が見られるが、家庭という場で発病の傾向を獲得しているものである。
- ⑦ **時間と自己について**——「時間の目覚め」と「自我意識」の成立とは、厳密に同時である。他に「言葉の意味と意義」「リテラシーとは」「自立とは」「未成熟と成熟との対比」。
- ⑧ **情動知能について**——「能動的な知性」の基盤となるのは、豊富な体験とそれらの経験化である。情動知能を獲得している人と、獲得していない人の具体的行動の視点。
- ⑨ **ヘレン・ケラー自伝**——「言葉が奇跡的に世界に花を開かせてくれた。この時の私ほど幸せな子どもは、そう簡単には見つからないだろう」。

記

○日 時 《土曜日グループ》 【時間】 12:30~14:30

- ①1月30日(土) ②2月6日(土) ③2月13日(土)
- ④2月20日(土) ⑤2月27日(土) ⑥3月13日(土)

《水曜日グループ》 【時間】 14:00~16:00

- ①2月3日(水) ②2月10日(水) ③2月17日(水)
- ④2月24日(水) ⑤3月3日(水) ⑥3月10日(水)

★(土)(水)同じプログラムですから、ご都合に併せてご参加ください。

○受講料(一括) 15,720円(1回2,620円)

○毎回あるテーマについて資料を読み込んでもらい、そのテーマをもとに「やりとり」をいたします。どんな時も「事実のやりとり」さえしていれば、人間の精神は活動的であり続けます。従って元気です。

申込書

平成 年 月 日

フリガナ			
氏名		TEL	
住所	〒	FAX	
備考			